世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『年少組の小さな先生』

第 26 話

制作　日本アニメーション
　　　フ ジ テ レ ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第二十六話「年少組の小さな先生」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モーリー
ジェームス
デュファルジュ
エミリー（人形）
シーザー（猫）

1

ミンチン女学院・一階廊下

振鈴を鳴らすアメリア――

×　　×　　×

眠っていたシーザーが、のっそりと起上る。
どっと教室へ急ぐ女生徒たちの足、足。
シーザー、跳ね飛ばされて、ガツン。

2

同・地下の洗い場

セーラが、鍋や食器を洗っている。
食堂から、皿や食器を下げて来るベッキー。
ベッキー「あ、お嬢様、ここは私がお引受け致しますから」
セーラ「でも、洗い物がこんなに……」
ベッキー「いいえ、お嬢様……お嬢様は、今日から、ロッティさんた

ち、年少組の皆さんに、フランス語をお教えになるんでご
ざいましょ」
セーラ「え、ええ……」
ベッキー「私、嬉しいんでございます……お嬢様が、先生に御出世さ
れたなんて……」
セーラ「まあ、出世だなんて……デュファルジュ先生のお蔭で、フラ
ンス語の時間だけ、小さい子を受持つ事になっただけよ」
ベッキー「それだって、立派な先生でございますわ……お嬢様には、
こんな台所の仕事より、よっぽどお似合いでございますも
の」
セーラ「まあ、ベッキーったら」
そこへ、アメリアがのぞく――
アメリア「あ、セーラさん。授業がはじまるわ。その前に院長室に来
て下さいね」
セーラ「はい、アメリア先生……」

アメリア、去る――

ベッキー「さ、お急ぎになって」

セーラ「じゃ、ベッキー、悪いけどあとお願いね」

ベッキー「任しておいて下さいまし」

セーラ、前掛を外すと、出て行く――

誇らし気に、微笑で見送るベッキー。

モリーが入って来る――

モリー「さあさあ、今日から後片附けはお前一人だからね、急いでおくれ」

ベッキー「なあに、こんな皿洗いぐらい、私一人で充分でございますよ」

鼻唄で洗い出す――

モリー「（啞然）まあ、この子ったら……どうしちまったんだろ」

3
同・院長室の前

来るセーラ、ノックする――

ミンチンの声「お入り……」

4　同・院長室

入って来るセーラ――

セーラ「お早うございます、院長先生……」

デスクに向っていたミンチンが冷く振返る。

ミンチン「お早う」

ミンチン、立上るとセーラの身なりを確める。

ミンチン「生徒たちを教える心構えは出来ていますね」

セーラ「は、はい、院長先生……」

ミンチン「よろしい……お前が父を亡くした時、私に、どう申し出たか、憶えている筈です」

セーラ「え？……は、はい……」

ミンチン「そう……お前は、こう云ったのです……」

5

フラッシュ（十二話より）

院長室で、エミリーを抱いて懇願するセーラ——

セーラ「院長先生、ここに置いて下さるなら、私、どんな事でも致します」

ミンチン「そう……」

セーラ「はい、私、ロッティたちになら、フランス語を教えられると思います。ロッティたちも、私になついていますから」

ミンチン「おだまりなさい！……生意気を云うのはおやめ！　お前は明日から台所で働くのです！」

6

同・院長室

ミンチン「……その お前がこうして、あの時の希望を聞いて貰えるのも、私の、特別の思いやりからです。その事を決して忘れないように。判りましたね」

セーラ「はい、院長先生……」

ドアが開き、デュファルジュが入って来る。

デュファルジュ「やあ、お早う、院長先生」

ミンチン「お早うございます、デュファルジュ先生」

デュファルジュ「お早う、セーラ君」

セーラ「お早うございます、デュファルジュ先生」

デュファルジュ「どうかね。今日から授業を受持つ気分は？」

セーラ「はい、とても嬉しいです……ロッティたちと一緒に勉強出来るなんて」

デュファルジュ「はっはっは……では、教え方は君に任せるとするかな」

セーラ「はい！ デュファルジュ先生……」

ミンチン「では、先に教室に行って待っているように」
セーラ「はい、院長先生……」

7 同・廊下

出て来るセーラ、教室の方へ歩き出す。
×　×　×
教室の前に来たセーラ、女生徒たちの騒ぐ声に、ふっとためらう――

8 同・教室

あちこちでお喋りしているラビニアや、その他のグループたち――
――カチリとドアが開く。

はっと振返る女生徒たち――
ドアから、そっと入って来るセーラ。
ラビニア以下の視線が集中する。

セーラ「（途惑うが）お早う、皆さん」
ラビニア「まあ……誰かと思ったら、メイドのセーラだわ。部屋を間違えたのかしら」
ジェシー「あなた、教室に何の用？」
セーラ「なんのって……」
ラビニア「判ったわ、お掃除に来たのね」
ガートルード「だったら、早く掃除しなさいよ」
ジェシー「掃除道具はどうしたのよ」

どっと囃す三人――
立尽すセーラ――

アーメンガード「セ、セーラ……」

奥から、アーメンガードとロッティが飛び出して来る。

ロッティ「やめてよ！　セーラ・ママは、今日から私たちの先生よ」
ジェシー「ヘン、なにが先生よ。セーラは、今だって台所で働くのよ」
ガートルード「そうよ……あんた達にフランス語教えるのは、市長夫人のちょっとした気まぐれからよ」
ラビニア「でも、よかったわね、私たち。セーラに教わるハメにならなくって……台所のメイドにフランス語を習ってるなんて聞いたら、お母様、きっと私をこの学校やめさせるわ」
ロッティ「セ、セーラ・ママ……」
泣顔でセーラに飛びつく――　じっと耐えるセーラ。
その時、ドアが開いて、デュファルジュが入って来る。
デュファルジュ「ボンジュール、マドモアゼル……」
女生徒たち「ボンジュール・ムシュウ……」
続いて、ミンチンが入って来る
ミンチン「では、皆さん……今日から年少組のフランス語の授業は、隣りの教室でする事に致します……ロッティ、スーザン、ペ

ネラビ、ジュイン……あなた方はそちらへ移るように」

ロッティ「わあい……」

アーメンガード「あのォ……私……」

ミンチン「なんです」

アーメンガード「私……」

ミンチン「なんなのかはっきり仰言ゃい！」

アーメンガード「私、フランス語、ダメだから……」

どっと笑う一同——

デュファルジュ「残念ながらその通りのようじゃね、アーメンガード君」

アーメンガード「す、すみません」

デュファルジュ「（微笑）では君も、セーラ君の組に移るといいじゃろう」

アーメンガード「えッ……うわあ、よかった！」

はっと、慌てて口を押える——

ミンチン「では、セーラ……しっかり授業をするのですよ」
セーラ「はい、院長先生……」

9 同・廊下

ミンチンが出て来ると院長室へ——
続いて、セーラとロッティ、アーメンガード、スーザン、ペネラピ、ジェインが出て来る。
待ち構えたシーザーが、のっそりとセーラたちのあとに続く——

10 同・遊戯室

入って来るセーラと、ロッティ、アーメンガードたち——

シーザーも、のっそりと入って来る。

セーラ「まあ、あなたもお仲間になりたいの？」

シーザー、甘えて尾を振る。

セーラ「じゃ、静かに坐っているのよ」

シーザー、尾を振ってロッティと並んでうづくまる。

セーラ「さ、今日は、はじめてだから、やさしい所からはじめましょうね」

ロッティ「うん……」

アーメンガード「ね、セーラ、私、フランス語の単語がひとつも憶えられないのよ」

セーラ「大丈夫よ……じゃ、身の廻りのものから憶える事にしましょう……例えば、この猫は？」

ロッティ「シーザー！」

セーラ「（微笑で首を振る）それは、ナ、マ、エ」

ロッティ「エエッ？」

セーラ「フランス語で、牡猫のことは、ル・シャ……はい、みんなで云ってみましょう」

セーラ、ロッティ、アーメンガードたち、一斉に発音する——

全　員「ル・シャ……！」

シーザー、クシャッとくしゃみして立上り、「ニャア」と応える。

笑う一同——

アーメンガード「わあ、これなら、私にも憶えられそう」

セーラ「でしょ……さ、次は女の子よ……女の子はラ・ピュセール（la pucelle）」

11 同・台所

買物篭をベッキーに渡すジェームス。

ジェームス「さあ、今日の買い出しは、お前に行かせるからな」
モリー「いいかい。お釣りを間違えるんじゃないよ」
ベッキー「大丈夫ですとも……行ってきまあす」
ベッキー、鼻唄で出て行く。
唖然と顔を見合せるモリーとジェームス。

12 コベントガーデン市場の一角

野菜クズを掃除しているピーター。
その時、一方から――
声「ピーター……！」
ピーター、振向いて驚く――
野菜篭を抱えたベッキーが駆けて来る。
ピーター「いやあ、誰かと思ったら、ベッキーじゃないか。久し振りだなあ」

ベッキー「ほんと！　あんたがお嬢様専用の馬車の御者をやめさせられて以来よ」

ピーター「そうだったな……所で、今日は、一体どうしたんだい。まさか、お嬢さんが病気になって、代りに買い出しに来たんじゃ……？」

ベッキー「違うのよ。ピーター……お嬢様はね、ミンチン女学院の先生におなりになったのよ」

ピーター「な、なんだって？」

13

ミンチン女学院・遊戯室

セーラが、手にした石版に「　juillet　」と美しい書体で書き、ロッティ、アーメンガードたちに示す。

セーラ「七月のことは、フランス語で、ジュイエ、ね……さ、云ってみましょう」

全　員「ジュイエ……！」

セーラ「そうそう……では、八月は……」

14　同・廊　下

後手に、ドア前で窺っているデュファルジュ、微笑で頷くと、ゆっくりと自分の教室の方へ戻って行く。

（中　C　M）

15

同・院長室

デスクに向って帳簿を拡げているミンチン――
アメリアが、ソファでフランスししゅうをしている。
帳簿を閉じたミンチンが、ニコヤカに振返る――

ミンチン「アメリア……」
アメリア、はっと顔をあげる。
アメリア「は、はい、お姉様……」
ミンチン、自分の思いつきを愉しむように続ける――
ミンチン「あなた、私が、これから先、あのセーラをどう扱おうとしているか、判って？」
アメリア「い、いいえ……」
ミンチン「セーラの父親が、破産して死んだお蔭で、この学校がどれ程損害を受けたか、あなたもよく憶えているでしょう」
アメリア「ええ……だから、お姉様が、セーラさんをメイド代りに…

ミンチン「……」

アメリア「（首を振る）いいえ、それ丈では不充分です」

ミンチン「えっ……」

アメリア「私は、いずれあの子を仕込んで、この学院の教師にさせるつもりです」

ミンチン「まあ……」

ミンチン、立上ると歩き廻りはじめる。

アメリア「あの子には、なかなか勉学心があります……二、三年経てば、フランス語ばかりか、他の学科も任せられるようになるでしょう。そうなれば、他の先生を頼む出費も節約出来、この学院経営に大きなプラスとなる筈です」

ミンチン「では、お給料も払わずに？」

アメリア「当然です……（歩き廻る）あの子には、そうやって私たちに損害を返す義務があるのです」

ミンチン「（呟く）可哀想に……一生タダ働きなんて、私と同じだわ

ミンチン「(振向く) なにか云って？」
……」

アメリア「いいえ……でも、あの子が大人になって、もしここを出たいと……」

ミンチン「許しません！……あの子は、一生私に逆うことのないよう、今日からビシビシ仕込むつもりです。判りましたね、アメリア」

アメリア「は、はい、お姉様……」

ミンチン、満足の微笑――

ミンチン「さ、あの子の教え振りを見て参らなくては……」

16	同・遊戯室

全　員「ノゥバンブル……ディサンブル……」

セーラ「そうそうこれで12月まで憶えたわ……今日は、随分フランス

語の単語を沢山憶えたわね」

ロッティ「ね、セーラ・ママ……じゃなかったセーラ先生……沢山憶えたごほうびに、お話して！」

セーラ「ええッ？！」

ロッティ「ね、お話して……お願い！」

一同、同意してさわぐ。

セーラ「でも、なんのお話がいいかしら」

アーメンガード「ね、セーラ……お父さんが、またこんな本を送って来たんだけど」

持っていた本を渡す——

セーラ「まあ、アルフレッド大王の物語ね」

ロッティ「ね、誰なの、その大王って」

セーラ「アルフレッド大王はね、今から丁度千年ほど前、このイギリスを治めていた、とても偉い王さまなのよ」

ロッティ「ヘエエ……どうして偉いの？！」

セーラ「イギリスではじめて学校を作った王様だし、ラテン語の聖書を英語に訳されたり……そうだわ、今日は、アルフレッド大王のお話をしてあげましょうね」

ロッティ「うわあィ」

喜ぶロッティたち——

アルフレッド大王の本を拡げ、お話を聞かせはじめるセーラ——

セーラ「その頃、このイングランドは、北から攻め寄せて来たバイキングたちの為に、国の大部分を占領されてしまっていたのよ」

17

セーラのイメージ

押し寄せるバイキングの船——旗——軍勢——ときの声——

セーラの声「バイキングとの戦いに破れたアルフレッド大王は……」

×　　×　　×

湿地帯の森の中――

セーラの声「僅かな部下と共に、沼地の森に潜み、王様の身分まで隠して、再び敵と斗う機会を待っていたのね」

野鳥が飛び立つ――

湿地の水たまりを踏み越えて来る狩猟姿のアルフレッド大王（29才）と、数人の部下たち――

一方に、古い丸木小屋が見える――

セーラの声「森の中で、一軒の牛飼いの家を見つけたアルフレッド大王たちは……」

その小屋の方に進む一行――

セーラの声「疲れをいやすため、その家で休ませて貰う事になったの」

×　　×　　×

牛飼いの丸太小屋の中――　中央にある屋根へ吹抜けの炉ばたで、疲れた身を横たえる部下たち。アルフレッド

大王は、粗末な椅子に掛け、牛飼いのおばさんは、炉に乗せたケーキの平鍋を指して、何事かアルフレッド大王に云い残すと、奥へ入って行く——

セーラの声「大王たちを、通りがかりの猟師たちだとばかり思い込んだ牛飼いのおばさんは、丁度炉ばたで焼いていた焼き菓子を見ておくように大王に云いつけて、奥へ入って行ったのよ……」

炉ばたで、体を温めるアルフレッド大王、ふと矢を抜くと、炉の灰に、地図を書きながら、考えはじめる——

セーラの声「所が、バイキングを打破る事で頭が一杯だったアルフレッド大王は、焼きかけているお菓子の事など忘れて、作戦に夢中になってしまったの」

平鍋の焼き菓子が、こげて煙をあげはじめる——

眠っている炉ばたの部下たち

アルフレッド大王は、依然気づかずに、灰に描いた作戦

図で考え続けている。

――もうもうと煙をあげる黒こげの焼き菓子。

その時、奥から姿を現わす牛飼いのおばさん――　立ちのぼる黒煙に眼をむく。

セーラの声「焼き菓子がこげるのも気づかず、平気でいるアルフレッド大王を、そんな身分と知らない牛飼いのおばさんは、いきなり近づくと……」

近づきざまアルフレッドの横面を殴り飛ばす牛飼いのおばさん

×　　×　　×

突然、画面外から、ミンチンの声が飛ぶ。

ミンチンの声「セーラ！」

18　同・遊戯室

はっと、ドアを見るセーラ、ロッティ、アーメンガードたち――

×　　×　　×

開いたドアに、仁王立ちに立っているミンチン、いきなり近づくとセーラの頰を張り飛ばす――

セーラ「あぁッ……」

頰を押えて床に崩れるセーラ――

威丈高に見おろすミンチン――

ミンチン「なにをしてるんです！……私は、お前を生徒たちと遊ばせる為に、年少組を預けたんじゃありませんよ！」

頰を押え、茫然と顔をあげるセーラ。

突然、ロッティが、わっと泣きながら、セーラをかばってすがりつく。

ロッティ「やめて！　セーラ・ママを叩かないで！」

ミンチン「ロッティ！　どくんです！」

ロッティ「いやよ、いやよ！……セーラ・ママ、悪くないもん。私たちにアルフレッド大王のお話聞かせてくれただけだもん」

ミンチン「なんですって！」

その時、背後に声――

声　「おやめなさい、ミンチン先生……」

ミンチン、はっと振返る。

開いた儘のドアから、デュファルジュが静かに入って来る。

ミンチン「デュファルジュ先生……」

デュファルジュ「ミンチン先生、私も授業が気になって先刻様子を窺いに来たんじゃが、セーラ君は遊んでなんぞいませんでしたぞ。それどころか仲々すばらしい先生振りじゃった。この私が保証しますぞ」

ミンチン「ですが、デュファルジュさん……」

デュファルジュ「生徒たちにお話を聞かせていたのをとがめるおつも

りじゃな……いけませんぞ。ミンチン先生。授業の間にお話を聞かせるのは私もよくやること。授業を愉しくするには必要なことですわい」

デュファルジュ、ニコニコとミンチンに向う

デュファルジュ「それに、いまあなたのなすった事は、アルフレッド大王を殴った牛飼いのおばさんと同じですぞ」

ミンチン「なんですって⁉」

デュファルジュ「牛飼いのおばさんも、もし相手が身分の高い大王と知ってたら、殴りかかったりはせん筈じゃったろう……それと同様、もしセーラ君が、以前のように大金持の娘じゃったら、あなたはセーラ君を叩いたりしたでしょうかな」

ぐっとつまるミンチン

デュファルジュ「(微笑で首を振る)いいや、そうはされなかった筈じゃ」

ミンチン「………」

19 同・廊　下

いつの間にか一斉にのぞき込んでいる、ジェシー、ガートルードたち――

その時、一方でアメリアが振鈴を鳴らす。

20 同・遊戯室

はっと振り向くミンチン――ドアのジェシーたちに気づく。

ミンチン「な、なにをのぞいているんです！」

ジェシーたち、ぱっと逃げる。

ミンチン、セーラに向き直る。

ミンチン「セーラ……今日の所はこれまでにしておきます……さ、お前はもう台所仕事へ戻るんです」

セーラ「は、はい、院長先生……」

ミンチン、荒々しく出て行く。

両手をあげ、肩をすくめるデュファルジュ、ほっと見送るアーメンガード、ロッティたち。

21 同・台所

重い野菜篭を抱えて戻って来るベッキー、台におろすと、野菜を取り出し、メモ紙片と照し合せ、指を折り折り、釣銭を確かめる。

その時、肩を落して入って来るセーラ。

ベッキー「あ、お嬢様……」

セーラ「ベッキー……私の代りに、買い出しに……」

ベッキー「はい……でも、大丈夫でしたわ、この通り、お釣りも間違えずに……もっとも、お釣りの計算は、ピーターがしてくれたんですけど」

セーラ「まあ、ピーターに逢ったの？」

ベッキー「あ、それをお伝えするの忘れてました！　お嬢様がフランス語の先生になられたと云ったら、飛び上って喜んで……」

セーラ「そお……（沈む）」

怪訝にセーラを見るベッキー。

ベッキー「あの……いかがでした？　フランス語のお授業……」

セーラ、吐息で首を振る。

セーラ「私、ロッティたちに、お話を聞かせてあげていて、院長先生に……」

ベッキー「お嬢様……」

ベッキー、セーラの頬を見る。

ベッキー「ど、どうなさったんです、頬が赤くなって……」

セーラ「な、なんでもないの……」

セーラ、頬を押える

ベッキー、感づいて吐息する。

ベッキー「まあ……なんてことを……私は馴れていますけど、お嬢様は人に叩かれた事なんてない筈でいらっしゃるのに……」

セーラ「ベッキー……もういいのよ……」

その時、モリーとジェームスが入って来る

ジェームス「おい、セーラ……先生の代用が終ったら、台所仕事にさっさとかかるんだ」

モリー「院長先生のお云いつけだよ。あと廻しにした玄関洗い、早く片附けておくれ」

セーラ「は、はい……」

セーラ、前掛をとると、つけはじめる。

心配そうに見守るベッキー

22 同・表

またいつものように水桶を提げて使用人階段を上って来るセーラ——

玄関の石段を洗いはじめる。

23 同・教室

窓辺で、そのセーラを見おろしているラビニア、ジェシー、ガートルード達。

ロッティとアーメンガードに呼びかける。

ラビニア「ほら、見なさいよ……あんたたちのフランス語が働いてるわ」

アーメンガード「えっ……」

アーメンガードとロッティ、窓に来て見る。

――石段を洗っているセーラの姿。

ロッティ「セ、セーラ・ママ……」

ラビニア「フフ、先生から、台所のメイドに逆戻り……楽じゃないわね」

どっと笑うラビニアたち――

泣顔になるロッティとアーメンガード――

24 同・表

ドアが開き、本を抱えた帰り支度のデュファルジュが出て来る。

セーラ「あ、デュファルジュ先生……」

デュファルジュ「セーラ君……私の為に、辛い思いをさせてしまったようじゃ。許しておくれ」

セーラ「いえ、そんな……」

デュファルジュ「力を落さんで、頑張るんじゃ……必ず、良い運が廻って来る。では、オルボワ、マドモワゼル、セーラ」

セーラ「さようならデュファルジュ先生……」

デュファルジュ、帰って行く。

じっと見送るセーラ――

セーラのN「私は心配でした……私をかばって下さった事で、デュファルジュ先生に悪い事が起りはしないかと……そんな不安がつき上げて来たからでした」

（第二十六話　終）